

第 60 回日本人類学会大会公開シンポジウム( 2006 年 11 月 3 日( 金 )~ 11 月 5 日( 日 ))

## 人類史から人類学の将来像を展望する

オーガナイザー 馬場 悠男 ( 国立科学博物館 )

多賀谷 昭 ( 長野県看護大学 )

日時 : 11 月 4 日 ( 土 ) 14 : 00 ~ 16 : 30

会場 : 高知工科大学 教育研究棟 C 102 ( B 会場 )

**開催趣旨** 様々な民族集団への興味あるいは人間自身の由来に対する疑問から始まった人類学は、問題意識と研究方法の発展に伴って、自然人類学、民族学 ( 文化人類学 )、霊長類学、考古学、民俗学などに専門分化してきた。しかし、人類の存在自体の本質を理解するためには、人類史的な長い照準と人類誌的な広い観点から人類学諸分野を展望して、総合的な人類学を構築する必要があるだろう。十数年前に、戦前の APE の会 ( Anthropology, Prehistory, Ethnology ) を復活させる、あるいは Primatology と Linguistics を加えた APPLE の会にしようという動きがあった。本シンポジウムは、それらの動きの延長線上に位置づけられ、特に、ここでテーマとする「人類史」という認識は、APE の会の復活に関与された佐原真さんの問題意識でもあった。今回のシンポジウムでは、まず各分野の立脚点と問題意識を提示し、今後の総合人類学の発展の方向性を探っていきたい。なお、本シンポジウムは昨年 に創立された「人類学関連学会協議会」( 日本人類学会、日本文化人類学会、日本霊長類学会、日本民俗学会、日本生理人類学会 ) の活動の一環でもある。

総司会 馬場悠男 ( 国立科学博物館 )

### プログラム

#### サルを見て人間本性を探る ?

五百部 裕 ( 椋山女学園大学・人間関係学部 )

Can we investigate humanity by primatology ?

IHOBE, H.

ヒト以外の霊長類を研究対象とした「霊長類学」の大きな問題意識の一つは、「サルを見て人間本性を探る」ということであった。そしてこうした問題意識から、これまで 50 年以上にわたって、さまざまな種、さまざまな調査地、さまざまなテーマで、「サル」の野外研究が進められてきた。しかし、こうした研究によって私たちは「人間本性」に迫るこ

とができたのだろうか？今回の発表ではこの疑問を出発点として、私自身の研究テーマである「狩猟・肉食行動」の話題を中心に、「サル」と「ヒト」を比較することの問題点や可能性について改めて考えてみたい。

## 人類史研究の新たなスタートライン

海部陽介（科博・人類）

A new starting line for human history researches

KAIFU, Y.

近年における進化医学や進化心理学の成功例が示すように、人類史的視点から、人間の諸側面の成立過程を探求する意義は大きい。人類学諸分野がそれぞれの研究成果を蓄積してきた現在、人類学は、総合的な人類史復元という一大目標に着手する体制を整えつつあるように思える。ここでは、そのような総合人類学的研究の意義、および国内における現状と課題について、主に生物人類学の視点から演者の考えを述べる。例えば現生人類のアフリカ起源の解明は、“人種”概念の議論に大きな影響を与えるだろう。一方で人類学諸分野の協調を困難にしている不運な背景もいくつかあるようだが、課題を意識することによってそれらは解決できるはずである。

## 環境史と人類史の架橋の可能性を探る

小野 昭（首都大学東京）

Contribution to the bridging possibility between environmental history and human history

ONO, A., Tokyo Metropolitan University

環境史と人類史の関係の基礎問題を整理することで、先史考古学の視点から一つの論点を提起したい。具体的には、1)「自然史と人類史」という二項対比的な問題の立て方は、「全体」-「人類」=自然、という等式の把握に基づいており、2)1世紀の学問的枠組みとしては多項系への移行を探る必要がある、2)環境と人類の関係を、「相関論」だけで考える傾向がよいが、相関即因果であるとする、環境・人類関係の議論は目的論におちいる危険性がある、3)「総合的な人類学」を構想する際には、環境系との関係を視野に入れた学問体系を構想する必要があることについて話題提供する。

## 人類文化の一様性と多様性をめぐって

川田順造（日本文化人類学会）

On the universals and the diversities of the human culture

KAWADA, Junzo

単一起源と見なされているヒトは、文化によって多様な自然環境に適応し、さらに多様な文化を生んだ。「文化」を本能も含めたヒトの営みの総体とすると、他の生物から区別されうるヒトの文化の一様性は、1) 直立二足歩行、2) 運搬具の使用、3) 二重分節言語の使用、4) 性交と摂食の対象としての同類と異類の区別の多様性、5) 性交・分娩・排便の文化によって好まれる体位の多様性など、多様であることが一様性にもつながる。自然史の中でヒトを認識することが求められている現在、ヒトの文化の一様性は、自然人類学や霊長類学との協同によって、文化の多様性のきめ細かな探究は民俗学との協同によって、明らかにされる面が大きい。

## 人・魚交渉史から見た日本文化 - 鰻と鮭を事例にして -

佐野賢治 (神奈川大学・日本常民文化研究所・民俗学)

**Eel and Salmon: a Japanese Folk-culture from a Viewpoint of Relations with Man and Fish**

SANO, K.

柳田國男は日本人の民族性(エトノス)を、稲作-祖先崇拜-家、の三位一体の連関性の中で捉えようとした。柳田の日本民族形成論ともいえる『海上の道』(1961)は稲の道ともいえるが、稲の伝播の本流とはなりえなかった。一方、鰻はまさに黒潮の魚類であり、その生態的不可思議さが幾多の民俗を醸成してきた。鰻食物禁忌が仏教の虚空蔵菩薩信仰に結合する過程を中心に、親潮の魚、鮭の初鮭儀礼などにも言及しながら、日本の民俗文化の斉一性に果たした修験道の役割を一考してみたい。